

---

# 神様の・・・

フェンリル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の・・・

### 【Nコード】

N2941D

### 【作者名】

フェンリル

### 【あらすじ】

彼女は声が出ない。そして、とある屋敷のメイドをしている。ただ、序章のはなし。

## ブローグ（前書き）

北欧神話をモチーフにしています。

## ブローグ

オカアサン。

私、大好きだったんだよ。

私、愛して欲しいって願ってた。

私、ずっと信じてた。

どんなに殴られても、嫌われても。

なのに、酷いよね。

私を売ったなんて。

．．．

．．．

．．．ねえ、何で．．．？

．．．

．．．

夢は見続けたいものなの．．．

ずっと、夢の中で幸せに

「起きろっつ！」

・・・。

ドスンと、部屋に鈍い音が響く。

自分がベッドから落ちたからだ。

「ささ、朝は早いわよ」

フ・・・フレイヤさん・・・。

慌てて起きて、朝の準備をする。

あまり似合わないメイドさんの格好をする。

眼帯をキュツと結ぶと、軽い朝食を食べ、屋敷の掃除に大忙し。

「・・・」

私は声が出ない。

理由は分からない・・・。

・・・分からないふりをしてるだけかも・・・。

でも、仲間はこんな私を受け入れてくれる。

だからとてもありがたいと感じてる。

「おっはよお                      !!!」

っ・・・!!

後ろから飛びついて慌てて身構える。

・・・口、ロキ様・・・

「眼帯、朝から掃除とは感心だね」

小柄で、くりつとした目の持ち主。

ロキ様は主人の「一人」に値する。

私より一つ二つ年下・・・だったはず。

つか、眼帯ってあだ名やめてほしいや・・・。

確かに眼帯してるけど・・・本当、悪戯好きだねロキ様は・・・。

・・・

・・・あれ？

今日、学校じゃ・・・急がないとダメじゃないですか？

雰囲気を感じてくれたのか、ロキ様は怪しい笑いを見せる。

「眼帯いゝ・・・今日は色々やる事があるんだよねゝ・・・」  
な・・・。

この笑い方は大抵、そう、悪事を考えてる・・・命をかけてもいいわっ!!

「ロキ、お前朝から姿が見えないと思ったら・・・!!」

と、ロキ様の動きが急に固まる。

どうやら、声の主は私の後ろにいるらしい。

「さあ、早く準備しろっ!!!!」

「ト・・・トール・・・」

赤毛の私より頭一つ二つ大きい男性。

ちなみに私より一つ年上だ。

この方も、私の主人の「一人」。

「朝から彼女に迷惑を掛けるなっ」

体格的に不可抗力な口キ様はあつさりツール様に連れて行かれる。

「はあくなあくせえく……………!!」

口キ様の声が段々と聞こえなくなると、私は再び仕事を続行する。

この掃除が終わったら、ちゃんとした朝食が食べれるからね。早めが一番。

「……………は体力的にも精神的にも何ら問題はありません」

「そうか……………良かった」

ほんと、安心した溜息をつく。

「私の「片割れ」だからな、彼女は……………」

「そうですね」

「私の片割れ……………とは言っても、性格も顔も何もかもが違う……………」

「



「唯一一緒なのは、そのただの人間や「神」より遥かな「力」を持っていることですね」

「・・・」

「まだ、時間はあります」

「そうだな」

「彼女は・・・まだ自覚をしていません」

「・・・」

「そして、その他の「神」もまた・・・」

「我たちは何も手出しできないのか」

「  
はい」

「そうか・・・」

「まだ、時は満ちていません、まだ・・・」



## ハジマリ（前書き）

彼女が目を覚ますと、主人の「一人」ロキのせいで書庫に閉じ込められていた。と、ロキは地下への階段を見つけるが

## ハジマリ

空が枯れている。

すべての木々もあっという間に枯れ、

そしてすべての生物が死に絶えた。

洪水は止まることを知らず、生き物という生き物が悲鳴を上げ、息絶える。

私はただひとり、立ち尽くす。

涙が地面に落ちても、すぐに吸収されて乾いてしまう。

「・・・・・・・・ラクナログ・・・・・・・・」

私は、ぽつりとその単語を呟く

．．．ん

．．．た．．

．い．．さん．．．

さつきから誰？

私を呼びかけるのは．．．。

とても遠くて．．．近い．．．声．．．。

「眼帯さ　　っん」

「．．．．．っ！！！！！！！！」

ロッ．．．．．ロロロロロ．．．ロキ様！

息がかかるぐらい近いっ！！マジでっ！！

どうやら、読書中に昼寝をしていたらしい。

正確に言えば、屋敷内の地下にある書庫の整理中に。

え？何で本を読んでいたかって・・・？

・  
・  
・

・  
・  
・

・・・本好きの本能が勝手に働いて・・・。

・  
・  
・

・・・だ、だって面白い本がいっぱいだもん・・・。

いや、そうじゃなくて・・・何でロキ様が？

「学園から脱そ・・・早退してきたんだよ」

「・・・」

怪し。

畏怖の念を込めてじーっと見つけるとロキ様は返すようにニヤリと笑い、

「眼帯、仕事をサボってたコト、フレイヤや皆に言いふらすぞ」

「！」

性悪だ・・・。

むっつと口を膨らますと、急いで本を整理して部屋を出て行くところ。

「あ、そうだ」

ガチャガチャガチャ・・・

「そのドアな」

ガチャガチャガチャ・・・

「今、開かないんだよなー」

ガチャガチャガ・・・チャ・・・

え？

開かない？

音速のスピードで振り返ると、ロキ様が悪気がなさそうにニコニコ笑う。

「ちょっと、ドアをいじくってたらさ、何か壊れて」

・  
・  
・

・  
・  
・

どっ……どーすんのよ……!!!!!!

無言(というか声が出せない)でパニックつてると、ロキ様は周りをウロウロして、

「あ、地下発見」

え？

整理してた時、そんなのあったけ……？

「どうする、眼帯？行ってみる？」

こんな書庫、とてもじゃないけど人が来ない。

あーでも、来週ぐらいまで待てば一人ぐらいは……

・  
・  
・

・  
・  
・



・・・そこまで生きていられるか不安だけど。

私一人ならともかく、ロキ様がいるわ。

こういふときのロキ様は結構頼もしいかも。

こくつと、静かに頷くと、ロキ様は

「じゃ、行ってみるか」

地下っぽいところは階段が下へ下へと繋がっている。

上に行きたいんだけど・・・大丈夫かな・・・。

・・・

・・・

・・・

地下の地下って結構寒い。

そして、酸素が薄い気がする。

というか、空気が古い気がする。

ランプの火が唯一の灯りだ。

「うー・・・あ、やっと地面だ」

ロキ様がリードしてくれるからありがたい。

とんっ

不思議な事に、砂埃がたたない。

そういえば、蜘蛛の巣も全然無かったな・・・何故？

・・・ガール・・・

さっき、何か聞こえなった？

け・・・獣の様な・・・

口キ様・・・

酷く不安な顔をしているのか、口キ様はほんと頭をたたくと、

「大丈夫大丈夫っ」

・・・

・・・

今からでも上に戻っても問題ない気がするけどな・・・

もしかしたら、戻ってこない私とか心配して来てくれる人がいるか  
もしれないし・・・

でも、足が止まらない。

前へ前へと勝手に進む。

・・・

・・・何でだろう・・・

ランプの灯りでしか分からないけど、この部屋は相当広いだろう。

なかなか壁がないし。

・・・蜘蛛の巣や埃が全く無いというのはやっぱりおかしい。

毎日誰かがずっと掃除をしてる？

でも、雰囲気的に誰も使ってない・・・。

・・・

・・・

と、急に、可愛い女の子の声が聞こえた。

「お久しぶりです、お父様」

「え？」

口キ様がこっちをぐるっと見る。

「眼帯、さっきお前喋ったか？」

ブンブンと首を振る。

事実だし。

「……………誰か、いるのか？」

どうやら信じてくれたらしい。

「……………私のこと、忘れちゃったのですか……………」

返事がすぐに返ってきた。

近いのか遠いのかよく分からない。

「姿を見せろ」

ロキ様がこんな真剣な顔をしているのを見たのは初めてだ。

やっぱり自分も女の子なので、ロキ様の服をちよっぴり握る。

「…………はい…………」

ボウッ

本で読んだことがあるみたいに、いきなり周りの照明ランプが灯される。

私が想像してたどおり、この部屋はとても広かった。

例えるなら……そう、ダンスホールだわ。

私達が少し離れた所に声の主がそこにいた。

ロングヘアーで少し髪の毛が巻いてて……片目が髪の毛によって隠れている。

「噂どおり、全部・・・忘れてるのですか・・・」

「意味が分からない・・・お前は一体何なんだ？」

ロキ様の言うどおり。

後ろでこくこくと頷く。

「・・・」

少女は少し何かを考えているようだった。

「私は・・・お父様の娘です」

「・・・やっぱり意味が分からない

「で、お父様ってのは誰だ？」

ロキ様が喋れて良かった・・・。

私は喋れないから、もしこの状況が私一人だけだったらもの凄く困る。

というよりは、さっさと上に上がってると思っただけだね。

なーんて、あれこれ考えていると、少女はポツリと答えた。

「・・・ロキ様の娘です・・・」



予想外。

感想を言うには、難しい。難しすぎる。

この娘、もしかして電波……？

「なっ……ななな……何で俺より年上っばいお前が俺の娘なんだ？！」

ロキ様も動揺が隠せないみたいだ。

と、少女がクスリと笑う。

「アナタの本当の姿は邪神ロキ。本物の神サマです。

そして、私はヘルと申します。

お父様・・・ロキ様の娘で、冥界の番人をしています」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2941d/>

---

神様の・・・

2010年10月22日13時49分発行